

# とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名	太陽の子晴海トリトン保育園
施設所在地	中央区晴海1-8-2
法人名	HITOWAキッズライフ株式会社

## 1. 活動のテーマ

<テーマ>

「音・リズム」

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

商業施設の中に保育園があるため、居住者が近隣にいらっやらない環境が思い切り「音・リズム」を楽しむには最適だった。家庭ではできない貴重な体験をたくさん出来るように配慮した。子供たちは楽器が大好きで制限なく鳴らしたい。その思いも叶えながら、さらに多くの楽器に触れてみて、どんな探求が深まるか、考察していきたい。

## 2. 活動スケジュール

### 【子どもたちの興味からテーマを設定する】

音楽が好きなのに環境が十分でない。楽器の取り扱いになる状況。子どもたちにもっと音楽やリズムに触れる機会を作りたいとスタッフで話し合いを行った。

### 【たくさんの楽器に触れる】

7月～8月 1歳児～5歳児までの全クラスでたくさんの楽器に触れる。大きな音や優しい音などいろいろな表現を楽しんでいく。

### 【発達に合わせて音・リズム活動を深める】

9月以降の展開

1歳児⇒色いろな楽器を引き続き楽しむ。その延長で保育士と共に手作りの楽器へと進んでいく。秋の自然物のどんぐりを使ったマラカスなどを作り、既存の楽器と共に楽しんでみる。

その後も歌やリズムあそびも盛んになりミュージックボンバーや足ふみのコードミュージックパッドを保育室で毎日のように楽しむ姿が多くなる。

2歳児⇒沢山の楽器に触れているうちに、友だち同士で音やリズムを合わせ始める。まるでセッションのように楽しく顔を見合わせながら飽きることなく続ける姿が見られる。その様子から保育士がカラオケステージを保育室内に設置。その後は歌ったり、踊ったり、リズム遊びをしたりと盛り上がる様子が見られた。

3歳児⇒いろいろな楽器に触れる経験をおとして、自分の好きな楽器が見つかる。その楽器を思う存分に楽しむ時間を設けていく。また楽器でおしゃべりしてみたいとなり保育士の提案で言葉とリズムを合わせて表現してクラスみんなで楽しんだ。その後は自分たちで楽しく奏でながら運動会での入場に楽器隊になったり、発表会ではたくさんの保護者の前で音楽に合わせてのリズム遊びを披露した。好きな楽器を楽しむところでは発達について右腕と左腕の差を観察中の園児が和太鼓に強い興味を持ち、力強くたくことで弱かった方の腕が強くなり、保護者も喜んでいた。この事例では「好きが牽引していく」ことで楽しみながら成長していくという音楽の力を強く感じた。

4・5歳児⇒好きな楽器を思う存分に楽しく使えるということで制限なしの活動からスタートし思いきり鳴らしたり騒いだりしたが、そのうちに自分たちからも「騒がしい・心地悪い」という感情が出てきたようだった。その後は「キレイな音だから聞いて～」や「あわせてみよう～」などの意見が聞かれるようになる。運動会では「ソーラン節」をやりたいとなり和太鼓にあわせて披露した。また発表会では自分の好きな楽器を演奏して合奏を披露した。その後、響きや振動にも興味が拡がりガラスのコップを使っでの探求に展開していった。このグラスハープの活動では4・5歳児がドレミファソラドではない音階を作り、さらに「暗い音だから暗い色の絵のぐ」「高い音だから黄色」といった音のイメージにあわせて色のグラスハープができあがった。スタッフは活動の前に試行錯誤しコップの種類や水の量を調節して音階の正解例を事前に準備していたが子どもたちの主体的な発想は大人の予想を遥かに超えていった。音を起点に表現が色・言葉などへ幅が拡がり探求が深まった。この経験から「子どもを信じる力」を大切にすることがスタッフの共通認識となった。

### 【成果をみんなに披露する】

5歳児がピアノとグラスハープ、自作楽器による演奏会を企画中

スタッフ、他のクラス、保護者を招待して、盛り上げようとしている

保護者を交えたテラス音楽会を企画中

## 3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

室内：1歳児⇒たくさんの楽器にふれる環境。手作りどんぐりマラカス作り。ミュージックパットの設置。

2歳児⇒たくさんの楽器にふれる環境。お気に入りの楽器を保育室に設置。保育室内に舞台を作る

3歳児⇒たくさんの楽器にふれる環境。好きな楽器でおしゃべりするあそびを準備する。好きな楽器を演奏しながら行進する経験（運動会入場）制限なく楽器に触れられる環境。合奏を楽しむ（発表会）

4・5歳児⇒たくさんの楽器(グロッケン・オルガン・マラカス・トーンチャイム・和太鼓・ギロ・カホン等)にふれる環境。セッションを楽しめる環境。和太鼓の音に親しむ（運動会）好きな楽器で合奏を楽しむ。（発表会）。ガラスのコップを用意して子どもたちが自由に楽しめる環境。

テラス：親子で楽しめる環境を作った。外に出せる楽器を晴天の日に準備。

## 4. 探究活動の実践

### <活動の内容>

#### 【子どもたちの興味からテーマを設定する】

全職員と研修 すくわくプログラムの実施について話し合う、テーマを決定する

#### 【たくさんの楽器に触れる】

②子どもたちの興味・関心に任せて自由にたくさんの楽器に親しむ。

③各学年で感じた事や興味のあることを探求していく

#### 【発達に合わせて音・リズム活動を深める】

1歳児：体を動かして音がなる楽しさ。（手作りおもちゃ・ミュージックパット）

2歳児：ともだちと一緒に音やリズムを楽しむ。ステージでの表現を探求していく。

3歳児：楽器でもおしゃべりしてみたい。音とリズムでお話してみよう。

4・5歳児：制限なく楽しむうちに「合わせること」「きれいな音」に気がつく。力任せや自由に鳴らすだけでは「騒がしい」「気持ちが悪い」など自分たちの気持ちの変化なども探求していく。

好きな楽器を演奏して合奏を楽しむ。

#### 【成果をみんなに披露する】

運動会では和太鼓の音色を味わい・リズムに合わせて演技ができるようになる

発表会では保護者の前で好きな楽器での演奏を楽しんだ。またテラスで親子で楽器を体験できるスペースを設置して子どもたちの成長や楽しさを共有していく。

グラスハーブができあがった幼児クラスは「みんなにも聞いてほしい！」と手作りの楽器も用意しての演奏会を計画中。チケットや幕の作成にも活動を拡げている。

## <活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

1歳児⇒足ふみのパットを保育室に広げると、集中して音を楽しんでいた。「たのしいね～」と友達や保育士と笑顔になる姿が見られた。活動量の少ない歩行が安定しない園児もパットからパットに移りながら笑っていて保育士を驚かせた。

2歳児⇒自由な活動から一人ひとりの個性が感じられるステージ表現へと発展した。保育士はマイクや照明なども準備して環境から盛り上げていった。自然と拍手や手拍子・楽器で応援するなど輪が広がっていった。主体的な活動の中では、個々がやりたいことを見つけて表現していく姿が見られた。「うまいね～」 「カッコイイね～」 などお友だちとのやり取りも肯定的な関りが増えていた。

3歳児⇒楽器を自由に楽しんでいたら時間を忘れるほどに夢中になる。そこから「楽器でおしゃべりしたいね?」となりクイズのように「なんて言ってるでしょうか?」といいながらリズムを打ち始めていった。そこから楽器でのおしゃべりが楽しくなるように保育士も工夫しながら関り展開していく。高い音・低い音・大きな音・小さな音・きれいな音・こわい音など聞き分けておしゃべりも楽しんでいた。タンバリンで「タン・タン・タン」「な～んだ?」「リ・ん・ご?」など子どもたちらしい楽しみ方におともも全力で一緒に楽しんだ。また自分の好きな楽器をみんなのまえで披露したときには「踊れそうな音」や「学校のチャイムみたい」などイメージや動きを表現しながらクラスで共有しながら楽しむ様子があった。

また、左右の腕の力が違うためバランスを整えている園児が和太鼓に興味を持ち、汗だくになっても楽しそうに叩く姿が印象的だった。

4・5歳児⇒沢山の楽器に触れる中で園児同士でルールや約束を決めながら活動する姿が見られた。保育士からの静止ではなく、こどもたちから「うるさくてきれいな音が聞こえないね?」などの発言からだった。主体的な活動で子どもたちの底力を感じた。特に初めての楽器グロッケンは素敵な音色に子どもたちが夢中になってしまい、音が大きくなり過ぎた(金属音)ので布制のパチに変えてソフトに楽しむなど工夫や話し合いも沢山見られた。発表会ではその甲斐あって素敵な合奏を披露した。その後は響きや振動にも興味がひろがりガラスのコップを叩く音を「ド」かな?など話をはじめたため、たくさんのガラスのコップを用意して水の量を変えてみたりと音の探求になっていった。高さや口の広がりやガラスの厚さによっての音の違いを楽しみながら試行錯誤していくうちに「これは～ふえ」「これは～てい」「これは～ぎい」って聞こえるね?」などドレミファソラシドではない表現を見つけていた。その後はピアノの音とあわせてみるなどしていた。そこから音階ができての演奏まで興味のある子を中心に展開していった。現在は手作りの楽器やチケット・幕などを準備して演奏会をして「みんなに聞いてもらいたい!」と計画。探求したことを発信したいという行動につながり更なる成長を感じた。



## 5. 振り返り

### <振り返りによって得た先生の気づき>

①取り組み前の姿は少ない楽器を順番に使うような環境で思い切り楽しめていないような状況もあった。はじめから、探求の方向性を決めずに、子どもたちの興味・関心の赴くままにサポートを試みようということを研修で共有してスタートしたので学年による表現や感覚・感性の違いを感じられたことは非常に有意義で面白い活動となった。目標は「鼻歌が自然とでるような毎日」とした。

②とかく音楽というジャンルになると「お約束」や「ルール」が多くなることもあるが、今回の探求では、自由に主体的に楽しむなかで子どもたちからの発想発信で活動を展開したのでスタッフにとっても予想外の展開も多かった。

③大人が決めるルールではなく「きれいな音が聞こえないから優しくやろう！」という子ども発信の言葉。また普段は自分から活動に入ろうとしない園児が自ら動き出して楽しむ姿が見られるなどの「やってみたい！」という気持ちからの活動がいきなり子どもたちに必要かを気づくことができた。「子どもを信じる力」の大切さをスタッフも実感することができた。また「好き」という気持ちが大変な動作もスイスイとこなしてしまうことにも驚きと発見がありました。（筋力が弱くても和太鼓を叩き続けられた）

音の探求活動を起点に子どもたちの表現の幅が広がっていった（色・言葉）それを自分たちだけでなく他の人にも披露したいという意欲につながって更なる活動へと繋がっていく（演奏会の企画・運営など）良い循環になることに気づいた。【演奏会は2月に開催された】

4・5歳児がグラスハープをやってみたいとなり、スタッフも予想をしていない展開だったので「難しいのでは？」ということで予め正解（音階を作ってみた）を準備していたが、子どもたちは自分たちの発想で活動を展開していった。【ドレミファソラシド】と初めから思っていたスタッフとは違い、自分たちの音階を作って楽しむ姿に子どもの可能性の素晴らしさを感じる体験となった。

④以上のような多くの気づきをスタッフで共有することができ、保育の楽しさを分かち合う良い経験にもなった。今後も毎日の保育の中で音楽やリズムに触れる環境を大切にしていきたい。「1年で鼻歌が出るような保育園が実現できた」と感じている。この探求の成果を下の代にもつなげるようにしていきたい。